

一九一四年と一九一五年にマルクス主義の蛇の頭を断固として踏みつぶすところまで進まなかに血みどろの復讐となったのであるが、それと同じように一九二三年の国奴と民族虐殺者の行為を最後のに終らせる機会をとらえなかったことも、受けないではすまなかった。

マルクスズムとの怠慢な決算

フランスにほんとうに抵抗しようと思えるものが、五年前に戦場でのドイツの抵抗を内側から破滅させた諸勢力に、闘争をいどまなかったとしたらそんな考えはすべてまったくのナンセンスだった。ただブルジョア階級の間人だけしか次のようなとてつもない考えをもつことはできなかった。つまりマルクスズムは現在ではおそろしく以前とは違った性格のものになってきているだろうとか、一九一八年のゲスな指導者のできそこないどもはより上手に政府の各種のポストにはい上るために、その当時二百万の死者を冷淡に踏み台に使ったのだが、そのかれらが一九二三年の現在、国民の道徳意識に対して突然かれらのみつき物をささげる覚悟になっているかも知れないといった考えである。以前売国奴だったものが突然ドイツの自由のための闘士になるかも知れぬなどという希望はありうるはずのない、実にナンセンスな考えである。かれらはちっともそんなことを考えてはいなかったのだ！ ハイエナが腐肉から少しも離れることがないと同じように、マルクス主義者は祖国を売る仕事を見限ることはない。そうはいってもかつて、あんなに多くの労働者がドイツのために血を流したのではないか、などというこの上もなくばかげた異論には後生だからかかわらないでほしい。そうだ、ドイツの労働者はたしかに血

毒ガス

を流した。しかしその頃には、かれらはもはや国際主義的マルクス主義者では全然なかったのだ。もし一九一四年にドイツ労働者の精神的態度がまだマルクス主義的であったならば、大戦は三週間後には終わっていたことだろう。ドイツは、自国の最初の兵士が国境をただもうまたぐ前に崩壊したに違いない。いや、当時それにもかかわらずドイツ民族が戦ったという事実は、マルクス主義的妄想がドイツ人の心の奥底まではなお食い込むことができなかったことを証明している。だが、大戦の経過につれて、ドイツ労働者とドイツ兵士が再びマルクス主義の指導者の手中に逆戻りしていったが、それにちよūd比例して祖国はかれらを失っていったのである。戦争開始時に、そして戦争中も、あらゆる階層から出て、あらゆる職業をもったわが最良のドイツ労働者数十万が戦場でこころむらなければならなかったように、これらの一万二千か一万五千のヘブライ人の民族破壊者連中を二度毒ガスの中に放り込んでやったとしたら、前線での数百万の犠牲がむなしのものにはならなかったに違いない。それどころか、これら一万二千のやくざ連中が適当な時期に始末されていたとしたら、おそらく百万の立派な、将来にとって貴重なドイツ人の生命が救われたかも知れないのだ。だが、まっげ一本動かさずに数百万の人々を、戦場で血にまみれて死んでゆくままに放置したにもかかわらず、一万あるいは一万二千の民族を売る者、奸商、高利貸、詐欺師等を貴重な国民の宝物と見なし、それゆえかれらに触れることができないなどと公けに布告することは、たしかにブルジョア階級の「政治」にお似合いのことでもあった。このブルジョア階級の世界ではなにがより勝れたものであるのか、白痴なのか、柔弱なのか、臆病なのか、あるいははとことんまで墮落した根性なのか、ほんとうに判らないのである。かれらは實際運命によつ



角川文庫

—3144—

完訳 わが闘争

(下)

アドルフ・ヒトラー
平野一郎 訳
将積茂



角川書店



議のテーブルに招き、それからすでに仕上っている決議や計画、それについてたしかに意見をいうことが許されるが、しかし最初から変更できぬものと見なさないわけにゆかぬような代物を提案して、全世界にこのわれわれの面目を失わせる芝居を提供したのであった。もちろん、われわれの交渉使節は、ほとんどただ一度さえも、きわめて凡庸な普通の人間より勝っていたことはなかったし、たいていは、「ドイツ人は指導者や代表者に聡明な人物を選ぶことを知らないようですね」と、前ドイツ國務大臣ジューモンの面前で侮蔑的に述べたロイド・ジョージの厚かましい言辞の正当さがからによつてただ十分過ぎるくらい証明されただけであつた。しかしかりに天才がいたとしても、敵国民の断固たる武装意志と自国民の悲惨きわまる無防備に直面しては、いずれにしてもほとんど手も足も出せなかつたに違いない。

だが一九二三年の春に、フランスのルール占領をわが国の軍事的能力の回復のきつかけとしようと望むものは、差し当って国民に精神的武器を与え、意志力を頑強にしなければならず、さらにこのきわめて貴重な国民の勢力を破壊するものを絶滅しなければならなかつた。

一九一四年と一九一五年にマルクス主義の蛇の頭を断固として踏みつぶすところまで進まなかつたことは、一九一八年に血みどろの復讐となつたのであるが、それと同じように一九二三年の春にマルクス主義的売国奴と民族虐殺者の行為を最後のに終らせる機会をとらえなかつたことも、きわめて不吉な報復を受けないではすまなかつた。

マルクス主義との怠慢な決算　フランスにほんとうに抵抗しようと思えるものが、五年前に戦場でのドイツの抵抗を内側から破壊させた諸勢力に、闘争をいとまなかつたとしたらそんな考えはずべ

てまかつたのナンセンスだつた。ただブルジョア階級の人間だけしか次のようななどてつもない考えをもつことはできなかつた。つまりマルクス主義は現在ではおそろく以前とは違つた性格のものになつてゐるだらうとか、一九一八年のゲスな指導者のできそこないどもはより上手に政府の各種のポストにはいるために、その当時二百万の死者を冷淡に踏み台に使つたのだが、そのかれらが一九二三年の現在、国民の道徳意識に対して突然かれらの貢物をささげる覚悟になつてゐるかも知れないといつた考へである。以前売国奴だつたものが突然ドイツの自由のための闘士になるかも知れぬなどという希望はありうるはずのない、実にナンセンスな考へである。かれらはちつともそんなことを考へてはいなかつたのだ！　ハイエナが腐肉から少しも離れることがないと同じように、マルクス主義者は祖国を売る仕事を見限ることはない。そうはいつてもかかつて、あんなに多くの労働者がドイツのために血を流したのではないか、などというこの上もなくはかげた異論には後生だからかかわらないでほしい。そうだ、ドイツの労働者はたしかに血を流した。しかしその頃には、かれらはもはや國際主義的マルクス主義者では全然なかつたのだ。もし一九一四年にドイツ労働者の精神的態度がまだマルクス主義的であつたならば、大戦は三週間後には終つていたことだらう。ドイツは、自國の最初の兵士が國境をたたくもつた前にも崩壊したに違いない。いや、当時それにもかかわらずドイツ民族が戦つたという事実は、マルクス主義的妄想がドイツ人の心の奥底までではなお食い込むことができなかったことを証明している。だが、大戦の経過につれて、ドイツ労働者とドイツ兵士が再びマルクス主義の指導者の手中に逆戻りしていったが、それにちよつと比例して祖国はかれらを失つていったのである。戦争開始時に、そして戦争中も、あらゆる階層から出て、あらゆる職業をもつたわが最良のドイツ労働者数十万が戦場でこつむらなければならなかつたよつた、これらの二万二千か一万五千のヘブライ

人の民族破壊者連中を一度毒ガスの中に放り込んでやったとしたら、前線での数百万の犠牲がむなしのものにはならなかったに違いない。それどころか、これら一万二千のやくざ連中が適当な時期に始末されていたとしたら、おそらく百万の立派な、将来にとって貴重なドイツ人の生命が救われたかも知れないのだ。だが、まっげ一本動かさずに数百万の人々を、戦場で血にまみれて死んでゆくままに放置したにもかかわらず、一万あるいは一万二千の民族を売る者、奸商、高利貸、詐欺師等を貴重な国民の宝物と見なし、それゆえかれらに触れることができないなどと公けに布告することは、たしかにブルジョア階級の「政治」にお似合いのことでもあった。このブルジョア階級の世界ではなにがより勝れたものであるのか、ひどい精神遲滞者なのか、柔弱なのか、臆病なのか、あるいはどこんまで墮落した根性なのか、ほんとうに判らないのである。かれらは實際運命によって没落が定められている階級であるが、ただ残念なことは全民族がかれらによって地獄にいっしょにひっぱり込まれることである。

だが一九二三年にわれわれが見出したものは一九一八年とまったく同じ状況であった。どのような種類の抵抗が決意されようがそれはまったく同じことであり、第一になさるべき前提はつねにわが民族からマルクス主義の毒を排泄させることであつた。そしてわたしの確信からすれば、当時ほんとうに国家主義的な政府がなすべき最初の課題は、マルクス主義に殲滅戦を宣告する決意をしている勢力を探して見つけ出し、さらに、この勢力に自由な進路を開拓してやることだつた。外敵が祖国にこの上なく破壊的な打撃を加え、国内ではどここの街角にも反逆者が機会をねらっている時期には、「安寧秩序」などというナンセンスを崇拜しないことが政府のなすべき義務であつた。しかし、ほんとうに国家主義的な政府であれば、当時は無秩序と社会不安こそを願うべきだつた。というのも、それら

社会的混乱の中でなければ、わが民族の仇敵、マルクス主義との根本的な決算が結局不可能であり、生じえなかつたからである。このことが放置されたならば、抵抗についてどんな種類の考えがでっち上げられようともまったく変りはなく、それらはすべてまきれもなく狂気の沙汰であつた。

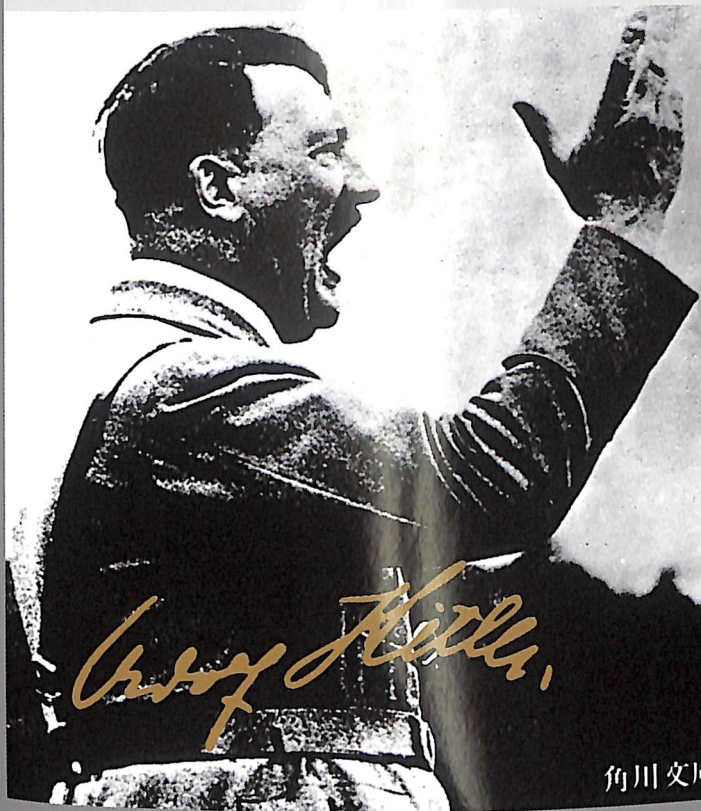
もちろん現実的な、世界的重要性をもつたこのような決算は、枢密顧問官といつた連中や、老いぼれて干からびてしまつた内閣の首脳達の計画によって行なわれるものではなく、この地上の生命を支配する永遠の法則、この生命のための闘争であり、また永久にそうした闘争でしかありえない生命の法則に従つて実現されるものである。人々は次のことを思い浮べるべきだつた。つまり、血に荒れ狂つた内乱からはしばしば鋼鉄のように堅く健全な国民体が生成したのに、他方人為的に育成された平和状態からは、前代未聞の腐敗が生まれたのも、二に止まらないという事実である。民族の運命はピカピカした革手袋をはめた手で丁重に変えられることはできない。したがつて、一九二三年には、わが民族体をむさぼり食つていた毒蛇連中を捕えるためには、残酷きわまるつかみ方をしなければならなかつた。このことが成功してはじめて、積極的抵抗を用意することが意味をもつたのである。

わたしは当時幾度も幾度も声をからして演説し、少なくともいわれる国家主義の仲間にとつて次の二つのこと、つまり、今回はなにが賭けられているのか、そして一九一四年およびそれに続く数年の場合と同じような失敗をすれば、再び一九一八年のような結果に不可避免的に到達するに違いないことをはっきりさせようと努力した。運命のなすがままに任せて、われわれの運動にマルクス主義との対決の可能性を与えてくれるようにと、わたしは再三再四かれらに請ひ求めた。だがわたしは馬の耳に念仏を唱えていたのだ。かれらは、国防軍長官を含めて、すべてにつづいてもっとよく心得て、結局あらゆる時代を通じてもっともみじめな降服に直面するところになつたのである。

わが闘争 下

II 国家社会主義運動

アドルフ・ヒトラー 平野一郎 将積茂 訳



角川文庫